

極光のかけに

高杉一郎

極光のかけ

シベリア俘虜記

高杉一郎

人間選書Ⅱ



人間選書

II

極光のかげに



昭和二十五年十二月十五日 第一刷印刷
昭和二十五年十二月二十日 第一刷發行

定價二三〇圓

著者 高杉一郎

發行者 東京都千代田區神田駿河台三ノ一
目黒謹一郎

印刷者 東京都新宿區神樂町一ノ二
小酒井益藏

發行所 東京都千代田區神田駿河台三ノ一
株式會社 目黒書店

電話 神田一〇六〇
振替 東京二八〇九

小 序

何年何月何日に、誰が、鐵のカーテンを垂れてしまつたのか、僕は知らない。また、このカーテンは、羞恥の爲なのか、恐怖の爲なのか、それとも何の爲なのか、それも知らない。たゞ、同じ人間である以上、同じ小さな地球に住む弱い生物である以上、苦しみも悲しみも喜びも、お互ひに語り合ひ、慰め合ひ、祝い合ひ、有無相通じ合ふのが本當なのに、と思ふだけである。モリス・ドリュオン Maurice Druon が記してゐるやうに、「世界の血はあんなに明るく澄んでゐるのに、なぜ、人間の血はこんなにどす黒いのであらうか？」と、今更のやうに思ふのである。これは、鐵のカーテンに限らず、竹のカーテンの場合もさうだし、兩側の人間についても、公平に言はれねばならぬ。

シベリア俘虜記は、敗戦後、かなり澤山出たが、ソヴェート・ロシヤの制度やロシヤ人について、各々かなり區々な評價を下してゐたやうに思ふ。よく書けてはゐるが、何か不審を僕に起させる作品が多かつた。僕は、ソヴェート・ロシヤを全く知らないと言つてもよいし、ソヴェート・ロシヤの制度の背骨に當るコミュニズムについてもごく常識的なことしか判らないらしいが、とにかく、

資本主義が持つべき歴史的功績を十分に認めた上で、尙その罪障を考へる時、コミニズムの發生は、人間が人間の力で自らを處理する爲に、多くの暗示を與へてくれると思つてゐる。しかし、コミニズムの制度が、極めて封建的な帝政から一舉に社會主義制度へ飛び移つたロシヤで、果して人類の希望を十全に實現するやうなものになつてゐるのか？ 或は、コミニズムの制度や思想が、これを用ひる暗愚な人間の爲に、あらゆる制度や思想の當然持つ機械性を發揮したり、缺陷ばかりを見せることにはなつてはゐないか、と考へることが多い。

『極光のかげに』は、少くとも僕の疑問に答へるものを持つてゐたし、全體の印象として、他のシベリヤ俘虜記に勝るとも劣らぬ公平率直なソヴェート・ロシヤ見聞記のやうに、僕には受取れたのである。いかなる制度にも長短はある。そして、その制度での人間の優劣賢愚によつて、制度は生きもし死にもする。こんなことを僕は證明されたやうに思つた。黨員のなかにも愚劣な人間がゐて、制度の短所を一身に集めてゐるかと思ふと、實にほれ／＼するやうな人間的な黨員もゐる。そして、非黨員のなかには、新らしい制度に納得がゆかぬながらも、巧みに制度から利己的な甘い汁のみ吸はうとする人々もゐるし、今更新しい制度に希望は持てないにしても、周囲にゐる人間に對する愛情を生かして、下積みの苦しい生活を靜かに送つてゐる人々もゐる。ドリュオンの言葉を使つて僕は僕なりのことを言へば、「人間のどす黒い血は、清められねばならず、明るく澄んだ血にせねばならない」といふことになるが、これは、單に制度の變革だけから爲され得るものではな

い。各人の人間性の優秀さを形成することにも、重大な能因をもとめられるべきであらう。アンドレ・ジードが、「制度か人間か」と度々悩んだことは周知のことであるが、「制度及び人間」といふ形に問題を置きかねばならぬのではあるまいか？ 『極光のかけに』は、かうした僕の願ひを裏附けてくれたやうに思へてならない。

高杉一郎氏は、戦争前からよく存じあげてゐた篤學の士である。——高杉さん、鐵や竹のカーテンは、やはり、いづれ兩側から取つたほうがよろしく、取る爲には、兩側のよい人間たちの談合によるべきもので、決して兩側の愚人たちの殴り合ひ殺し合ひによるべきでない。さうは思はれませんか？

僕には、他人の著書の序文など書く資格は全くない。本小序は、高杉氏及び「人間」編集長木村氏の御要求に従つて綴つたまでのことである。幸ひ、拙文が本書の面目をけがさず、本書に誤解を招かずにすむならば、望外の欣びとせねばならない。

(Oct. 1950)

渡 邊 一 夫

裝裝
畫幀

內岡
田鹿
之
巖助

目次

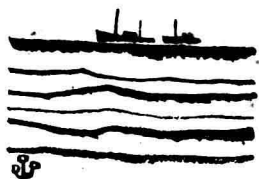
小	序	渡邊一夫	一
ア	ン	ガ	ラ
河			九
ど	ん	底	の
歌			二五
マ	ル	ー	シ
ャ			四
緑	の	隅	
.....			六
極	光		七
學	校		九
春			一〇
密	林	の	旅
.....			一〇

河岸通り	二四二
別れ	二五九
密林の涯に	二七一
懲罰大隊	二八九
晩夏	三三七
イルクーツク	三三三
炭鑛町で	二七七
ソヴェートの人間	二六七
ホルスト・ヴェッセルの歌	三〇七
歸還	三三三
あとがき	三三三

極光のかげに

——シベリア俘虜記

アンガラ河



私が毎日働きに通つていた事務所は、日本人俘虜收容所の衛門から五十メートルとは離れていない小高い丘の上に立つていた。

事務所の背後にはシベリア人が「黄金の^{ゴールド}」という形容詞をつけて呼ぶ密林がくろくろと迫っており、表の窓からはアンガラ河が重い色をして流れるのが四百メートルほど向うに見えた。河に面して斜め右の方には、アンガラ河岸に沿つてブラーツクの町が陰氣にひろがつていた。

ブラーツクは、シベリア本線から三五〇キロほど離れた密林のなかの孤獨な田舎町である。アカ河がアンガラ河に合流するあたりの小さな平野にたつている町で、人口二萬を数えようか。昔からの流刑囚の町であることを示して、町の中央にはいまだに古い監視望樓が立つている。映画劇場と官營賣店^{ヤカダ}に隣りあつて、三〇〇年前に建てられたという丸木小屋づくりの監獄が、今にも倒れそうに残つてゐる。その小屋には、四壁を通じて小さな窓がひとつしかない。荒涼とした空氣が町全體の上を蔽つてゐる。木造の國立銀行や町ソヴエットの屋

上に重く垂れている赤旗と、クラブの壁面に飾られているボルシェヴィク黨指導者たちの大きな肖像畫は、却つて町の暗さを際立たせるためのあかるい背景のようである。

この田舎町と外の世界をつなぐ動脈は、アンガラ河である。アンガラはバイカル湖から流れ出て、エニセイに合し、北極海へ注ぐ。五月の末から十月の始めまで、外輪船が赤旗をひらめかして上り下りする。イルクーツクまでおよそ五日の船旅である。

絶えず切々たる望郷の念のなかで暮している日本の俘虜たちにとつて、この汽船は毎日の生活に光を投げる唯一とつの喜びであると言つてよい。俘虜たちは收容所のある臺地の上から有刺鐵線の柵越しにこの汽船を望見しては、郷愁を慰める。十月の始め、イルクーツク向けの最後の汽船が河を遡つて行つたとき、彼らはどんなにがっかりしたことか。營養失調に苦しんでいた鈴木という兵隊は、それをきつかけに精神異常を來して入院し、二カ月の後、嚴寒の襲つてきた十二月のある日に遂に生命の灯を消した。死際に彼が呟いた言葉は「早く飯盒をくれ……船が出る……早くしないと間にあわない……」という悲痛なものであつた。飯盒に盛られる食事と、そして望郷の念が當時われわれの心を占めていたすべてであつた。

汽船の航行がとまり、やがてアンガラ河が結氷すると、このブラーツクの町は文字通り密林のなかに置き忘れられた孤島となる。あとは稀にトラツクがシベリア本線のトゥルン驛から密林と雪の曠野を横切つてくるだけである。

ところが、この密林の孤島が、數年ののちにはあたらしく開發されたシベリアのひとつの中心とならうとし

シベリア本線に平行して、だがシベリア本線のように蛇行してではなく直線コースで、シベリアを横断する
バイアム（バイカル・アムール）鐵道の建設計畫は戦前から有名であつたが、ソヴェート政府はこの計畫を戦後
五カ年計畫のなかであらたに採り上げた。そのバイアム鐵道はシベリア本線のタイシエツト驛を起點としてバイ
カル湖の北を通り、アムール河畔に立つコムソモルスクに直結するのであるが、その途中このブラーツクでア
ンガラ河を横切ることになつてゐる。すでに大鐵橋の建設準備は進められており、更にその下流には大きな發
電所の建設計畫があつて、ドイツと日本の機械が雨に曝されたまま山と積まれてゐる。

タイシエツトの町にはバイアム鐵道西部建設本部があり、ブラーツクの町にはアンガラ建設本部がある。私た
ち日本人はこの二つの本部に屬する勞働者として、二つの町を結ぶ三五〇キロの密林のなかにばら撒かれたの
であつた。その數は最低五萬と言われる。

私たちの收容所はタイシエツトから最も遠く、いわばバイアム建設の最前線に立つてゐた。

事務所では、收容所關係の六人のロシア人將校と三人の婦人事務員と、そして私とが毎日事務をとつた。
財務係のクレオシタ中尉は、日頃殆んど口もきかぬ物靜かで仕事熱心な將校であつたが、のちに瀆職事件に
ひつかかつてレオノフと交代した。その後、私は彼の囚人姿を町で見かけたことがある。道に立ち止つて眺
めてゐる私に氣がつくと、氣の弱い微笑を見せたが、警戒兵に促されて仲間といつしよに立ち去つて行つた。

アルマ・アタ出身の男で、たまに口を開けば、きまつてトロツキイが一時流されていたその「林檎の町」の美しさを自慢するのだつた。

労働基準量計算係のタラーソフ中尉は、下唇の厚い、赫顔の傲慢な男で、あるとき机の上に置いた自分の石鹼が見えなくなつたのを日本人の當番が盗つたのにちがいないと嫌疑をかけ、薪でなぐりつけたことがある。みんな歸つてしまつたあとのことで誰もとめる者がなく、満映の社員だつたというその病弱な兵隊は足腰が立たないまでに殴られ、それ以後氣が變になつてしまつた。その機會を巧みに利用して、意識的に呆けているのだという噂もないではなかつたが。

この傲慢なタラーソフはおそろしく物慾がさかんで、他に誰もいなくなると私のところへ來ては、時計を捜してくれとか、萬年筆をもつている兵隊はないかとか、そのときだけは馬鹿丁寧な言葉で懇願するのだつた。しかし、人前では持前の傲慢にかえり、私のことを輕侮の念をこめて「ミカド」とか「ファシスト」と呼んだ。そして、

「ヒットラーがウラルまでの歐羅巴を狙い、ミカドがウラルまでのシベリアを狙つた。おかげで君たちはお望み通りシベリアで働いているわけさ」とからかつたりした。

このタラーソフがいつも大事そうにしているシガレット・ケースは例によつて日本人から捲き上げたもので、表に「御賜」と金箔文字が入つていた。私は全員が揃つているところで、或る日タラーソフに日頃の御恩返し

をしたことがある。

「あなたはこのことになんと書かれてあるか知っていますか。ミカドがお前にこれを与えたところですよ」

彼が卑猥な罵言を叫びながら慌ててその金箔文字をナイフで削り取ろうとしているのを見て、みんなが噴き出した。私はそれで満足した。

經濟係のガルボフスキ上級中尉は、いつもその青白い顔に澁面をつくつていた。一度も晝食をとらず、晝食になると事務所の床板に直接その長身を仰向けに横たえて、溜息をつきながら「ああ眼がまわる」と呟くのだった。自分自身を含めて六人の大家族を養っているのに、晝食をとる餘裕がないのである。

胃の悪い私は時々高粱の粥^{カシヤ}を飯盒に食べ残した。するとガルボフスキは床から起き上つてきて、

「もし君が食べないなら、僕にくれ」

と言う。私はソヴェート軍の上級中尉の肩章をつけた將校が軍事俘虜に一飯を乞う事實に戦慄したが、

「どうぞどうぞ」

と急いで繰り返すのだった。彼は私の食べ残しの高粱を頬張りながら、

「君たちは幸福だよ。僕らがドイツのラーゲルにいたとき與えられたものと言えば、日に五百グラムのパンと水のようなスープだけだった。ああ、それに糞だ。なにかと言えば僕たちは殴られた。その頃の僕はこんなに瘡^{かさ}せていた」

そうでなくとも瘡^{かさ}せている兩の頬を更にすばめて見せた。

「しかしここでは誰も君たちを顧らないだろう。それに君たちは充分食ふことができる」

彼は日本人の満腹を示すために右手で顎の下をここまでというふうに指し示した。私は席にいたたまれない思いで顔を伏せていた。他のロシア將校もおそらく内心では苦々しく思つていたにちがいない。他人の私事に ついては一言も挿しはさみはしなかつたが。

あるときガルボフスキイは私が逸見の計算尺を持つてゐることを知ると、拜むように卑屈な態度で、記念のためにくれと私にせびつた。私はロシア人が蛇に對するような嫌惡感で話す「ユダヤ人的」というのはこれであるかと思つたりした。顔をそむけるようにして私は計算尺を渡した。恥ずかしげもなく、彼は、

「この竹が貴いのだ。ドイツやロシアの計算尺は目盛が木だから、氣候の變化ですぐ伸び縮みする」

などとみんなに見せて廻つた。

作業係のウスチャーヒン上級中尉はいつも顔を赤くしている氣のいい大酒呑みだつた。月給日には誰にいくら彼にいくらと、机から机へ借金を返して廻るのが常で、しかもよくその貸主がわからなくなつては、

「君には借りていなかつたかな」

などと訊くのだつた。その天成の善人ぶりが好きで、そんなときは私も、

「僕にも百ルーブル借りていますよ」

などと冗談口をたたいた。

俘虜時代に覺えたドイツ語を饒舌るのが得意で、なにかと言うとすぐ、ドンネル・ウェッターとかサクラメ